



TITLE:

On certain projective modules for finite groups of Lie type

AUTHOR(S):

津島, 行男

CITATION:

津島, 行男. On certain projective modules for finite groups of Lie type.
数理解析研究所講究録 1991, 768: 16-22

ISSUE DATE:

1991-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/82336>

RIGHT:

On certain projective modules for finite groups of Lie type

大阪市大・理 津島行男

Yukio Tsushima

K を標数 $p > 0$ の代数的閉体とし, q を p のべきとする。

$GL(n, q) \supset G_0$ を古典的線形群

$SL(l+1, q), Sp(2l, q), \underbrace{\Omega(2l+1, q), \Omega_{\pm 1}(2l, q)}_{\text{(斜交群)} \quad \text{(直交群)}}, \underbrace{ST(l+1, q)}_{\text{(ユ=7)-群}}$

とすると, G_0 は Steinberg module St とよばれる K 上 $|G_0|_p$ 次元の既約加群をもつ。 St は projective であり, また G_0 の複素加群に持ち上げることもできる。 $V = K^n$ を自然に G_0 -加群とみると, V は既約である。 Lusztig は $q \geq 3$ ならば $G_0 = GL(n, q)$ に対し, $St \otimes_K V$ が直既約 projective であることを示した (1974)。 その後奥山によつてこれが $SL(l+1, q)$ と $Sp(2l, q)$ についても正しいことが示された (1984)。

ここではこれを上にあげた古典的線形群すべてに対して拡張することを試みる。 G_0 を統一的に取り扱うためには,

Chevalley gp λ は Steinberg gp と見ると都合が良い。 また表現論的には $\overline{G_0}$ universal Chevalley (又は Steinberg) gp G に置きかえてよい。 G は G_0 の K 上の表現である。

このとき G の上にある (即ち K 上の) 半単純代数群の有理表現の G への制限として G_0 の既約 G_0 -加群が得られる。 この立場に立つて以下大雑把な方針を述べてみる。

1. 記号と準備

\mathfrak{g} を複素数体 \mathbb{C} 上の A_e, B_e, C_e, D_e type の単純 Lie 環, \mathfrak{h} をその standard Cartan subalgebra, Δ を \mathfrak{g} の \mathfrak{h} に関するルート系, Π を単純ルート系, Δ^+ を正ルート全体, W_Π を Δ の Weyl 群とする。 $\alpha \in \Delta$ に対し $h_\alpha \in \mathfrak{h}$ を α の coroot とし

$$X = \{ \mu \in \hat{\mathfrak{h}} ; \mu(h_\alpha) \in \mathbb{Z}, \forall \alpha \in \Delta \} \text{ とおく。}$$

$\mu \in X$ が dominant であるとは $\mu(h_\alpha) \geq 0$ ($\forall \alpha \in \Delta^+$) であることを言う。

$\Pi = \{\alpha_1, \dots, \alpha_e\}$ とおき $\omega_i \in X$ を $\omega_i(h_{\alpha_j}) = \delta_{ij}$ と定めよう。

$\{\omega_1, \dots, \omega_e\}$ は X の \mathbb{Z} -basis と取り、これを fundamental dominant weight とよぶ。 X^+ を dominant weights 全体の集合とすると

$$X^+ = \left\{ \sum_{i=1}^e a_i \omega_i ; a_i \in \mathbb{Z}^+ = \{0, 1, 2, \dots\} \right\}.$$

G_K^u を \mathfrak{g} による K 上の universal Chevalley grp. とする；

$$G_K^u = \langle x_\alpha(t) ; \alpha \in \Delta, t \in K \rangle.$$

G_K^u の Frobenius endomorphism σ を次のように与える：

$$\sigma(x_\alpha(t)) = x_{\tau(\alpha)}(\varepsilon_\alpha t^\delta)$$

ここで τ は identity かつ $\forall \varepsilon_\alpha = 1$ 又は τ は A_e, D_e type の

Dynkin 図形上の order 2 の symmetry かつ $\forall \varepsilon_\alpha = \pm 1$ である。

$G = (G_K^u)^\sigma$ を σ の fixed points のなす有限群とする。最初にあげた古典群はすべて G の central subgp. に属する factor grp. となる。

G_K^u の irreducible rational modules (over K) は X^+ による \mathbb{Z}

parametrise され、 λ の代表系は $\{L(\lambda); \lambda \in X^+\}$ と表され、

すなわち λ は $L(\lambda)$ の highest weight である。一方 G の既約加群 (over K) 全体は $X_g = \{ \sum_{i=1}^{\ell} a_i \omega_i; 0 \leq a_i \leq g-1 \} \subset X^+$

と表され、 $\{L(\lambda)'; \lambda \in X_g\}$ と表され、ただし $L(\lambda)' = L(\lambda) \uparrow G$ である。例として $L(0)'$ は trivial module, $L((g-1)\rho)'$ ($\rho = \sum \omega_i$) は Steinberg module である。一方 $G \rightarrow G_0$ を通じて $V = K^n$ を G -module と見ると $V = L(\omega_1)'$ である。ただし

$$\omega_1(\text{diag}(t_1, \dots, t_n)) = t_1, \quad \text{diag}(t_1, \dots, t_n) \in T$$

(g が B-type の場合は $\omega_1(\text{diag}(0, t_1, \dots, t_{2\ell})) = t_1$)

$\lambda, \mu \in X$, $\mu - \lambda = \sum r_i \alpha_i$ ($r_i \in \mathbb{Q}$) と表れるとき

$$\lambda \leq_{\mathbb{Q}} \mu \iff r_i \geq 0 \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

$$\lambda \leq \mu \iff r_i \in \mathbb{Z}^+ \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

と約束する。

また $\lambda \in X_g$ に対し $\lambda^0 = (g-1)\rho + \omega_0 \lambda$ とおくと $\lambda^0 \in X_g$ である (すなわち $\omega_0 \in W_{\Pi}$ は $\omega_0 \Pi = -\Pi$ とする π の元)。

既約 G -加群 $L(\lambda)'$ ($\lambda \in X_g$) の projective cover を $\mathcal{U}(\lambda)$ と表す。

$S\mathfrak{t}$ は projective であるから $S\mathfrak{t} \otimes L(\lambda)'$ も projective であり、したがって $\{\mathcal{U}(\mu); \mu \in X_g\}$ の直和で表される。Jantzen [1] に次の事が示されている (D-type の場合も含めた proof は津島 [3] 参照)。

Lemma 1. G is universal Chevalley gp / \mathbb{F}_2 is universal Steinberg gp of type D_ℓ ($\ell \geq 4$) とあると ($m(\lambda, \mu) \geq 0$)

$$St \otimes L(\lambda)' \simeq U(\lambda^0) \oplus \bigoplus_{\lambda^0 < \mu, \mu} m(\lambda, \mu) U(\mu)$$

これを "用", また A_ℓ type の universal Chevalley gp $SO(\ell+1, \mathbb{F})$ については別の考察を用いると, とも同様の事がわかる.

Lemma 2. $G_0 = SL(\ell+1, \mathbb{F}), \Omega(2\ell+1, \mathbb{F}), Sp(2\ell, \mathbb{F}), \Omega_{\pm 1}(2\ell, \mathbb{F}),$
 $SO(\ell+1, \mathbb{F})$ に $\lambda \neq 0$ が成り立つ.

$$(1) \quad St \otimes V \simeq U(\mu_1^0) \oplus m_1 St \quad (m_1 \geq 0)$$

$$(2) \quad G_0 = SL(\ell+1, \mathbb{F}), SO(\ell+1, \mathbb{F}) \text{ に } \lambda \neq 0 \text{ ならば}$$

$$St \otimes \bigwedge^k V \simeq U(\mu_k^0) \oplus m_k St \quad (m_k \geq 0, \quad 1 \leq k \leq \ell)$$

ただし $\bigwedge^k V =$ module of skew symmetric tensors of degree k .

上記の m_k を計算する = 以下全くの別の話となる, 次節でこれを述べる.

2. Levi subgroup Λ の reduction

$B_K^u = \langle x_\alpha(t), H_K^u, \alpha \in \Delta^+, t \in K \rangle$ は G_K^u の Borel subgroup であり,

$H_K^u = \langle H_\alpha(t), \alpha \in \Delta, t \in K^* = K - \{0\} \rangle$ は G_K^u は maximal torus

を与える ($H_K^u \subset B_K^u$). G_K^u は $(B_K^u, N_{G_K^u}(H_K^u))$ -pair を持つ

群であり, K の Weyl 群 $N_{G_K^u}(H_K^u)/H_K^u \simeq W_\Pi$ である. Π の

τ -stable subset J に對して Δ_J も J も基本ルート系とある

ルート系 Σ とし, W_J を Σ の Weyl 群とす。parabolic subgroup
 $\tilde{P}_J = B_K^\vee W_J B_K^\vee$ とおき $\tilde{L}_J = (B_K^\vee)_J W_J (B_K^\vee)_J$ を Σ の Levi subgroup
とす ($(B_K^\vee)_J = \langle \alpha_\alpha(H); \alpha \in \Delta_J, \alpha \in K \rangle H_K^\vee$)

$P_J = \tilde{P}_J^\sigma$, $L_J = \tilde{L}_J^\sigma$ とおく。 L_J は split $(B_J N_J)$ -pair of
characteristic p をもつ群となり, 特に Steinberg module
 St_{L_J} をもつ。 ($B_J = (B_K^\vee)_J^\sigma$, $N_J = N_{\tilde{L}_J}(H_K^\vee)^\sigma$)

complex character とし St は

$$St = \sum_J (-1)^{|J/\pi|} (1_{P_J})^G$$

である。 π は J は π の π -stable subsets を動かす, $|J/\pi|$ は
 J の π -軌道の個数である。 また $St|_{P_J} = (St_{L_J})^{P_J}$ であり,
 $(St, (1_B)^G) = 1$ とする ($B = (B_K^\vee)^\sigma$)。 φ を V の Brauer
character とする。 St の projectivity より

$$m_1 = \dim \text{Hom}_{KG} (St, St \otimes V) = (St, St \cdot \varphi) \quad (\text{指標の内積}).$$

より Frobenius の相互律より

$$m_1 = \sum_J (-1)^{|J/\pi|} (St_{L_J}, \varphi|_{L_J})$$

となる。 以下 $m_J = (St_{L_J}, \varphi|_{L_J})$ とおき m_J を計
算する。 上の公式は φ とし V の Brauer character とし、
も同様であるから (Lemma 2 の言ひより) m_K に対しても通用す
る。 G_0 の対角部分群 H の形ははっきりとわかる。

π の π とか $\varphi \geq 3$ の場合 $G_0 = \Omega(2\ell+1, q)$ を除くと、すべ
ての $m_J = 0$ が容易にわかる。 すなわち

Theorem 3. $g \geq 3$ とする。

$$(1) St \otimes V = \begin{cases} U(\omega_1^0) & \text{if } G_0 = SL(l+1, g), Sp(2l, g), \Omega_{\pm 1}(2l, g) \\ & \text{or } SU(l+1, g) \\ U(\omega_1^0) \oplus St & \text{if } G_0 = \Omega(2l+1, g) \end{cases}$$

(2) $G_0 = SL(l+1, g)$ or $SU(l+1, g)$ のとき

$$St \otimes \bigwedge^k V = U(\omega_k^0) \quad (1 \leq k \leq l)$$

proof. (1) の前半は easy. $\Pi \supset J$ を τ -stable とする。

$$m_J \neq 0 \Rightarrow \text{Hom}_{L_J}(St_{L_J}, V|_{L_J}) \neq 0, \text{ i.e., } St_{L_J} \otimes V|_{L_J}.$$

特に $V|_H$ は H -inv. な \bar{v} (= highest weight vector) を持つことになり、これは $\Omega(2l+1, g)$ 以外では不可能である。

$\Omega(2l+1, g)$ の場合、 $p=2$ ならば $Sp(2l, g)$ と自然に同型なので、 $p>2$ とする。このとき $V=K$ の first unit vector は H で fix されるので $m_\phi = 1$ である。 $J \neq \phi$ のときは highest weight vector は Borel subgroup B で fix されないことにより $m_J = 0$ となり、 $m_1 = 1$ が得られる。

(2) の証明は (1) が easy になるが、 $\bigwedge^k V$ の weight の状態と H の作用からやはり $m_J = 0$ がふたつ $m_k = 0$ を得る。

3. $g=2$ の場合

この場合 $H = (H_k^4)^{\sigma} = 1$ が universal Chevalley gp. G において成り立つので Theorem 3 の議論は通用する。実際符号

の和 $m_1 = \sum (-1)^{|J/\pi|} m_J$ を直接計算する (= となり), 最終的には 2 項係数に関する 2 つの恒等式が決め手となる。結果は 11 を記しておく。

Theorem 4 $SL(l+1, 2)$, $Sp(2l, 2) \simeq \Omega(2l+1, 2)$, $\Omega_{\pm 1}(2l, 2)$ に對し,

$$St \otimes V \simeq U(\omega_1^e) \oplus St$$

Theorem 5 $SL(l+1, 2)$ に對し

$$St \otimes \bigwedge^k V \simeq U(\omega_1^e) \oplus St \quad (1 \leq k \leq l)$$

Theorem 6 $ST(l+1, 2)$ に對し $(1 \leq k \leq l)$

$$St \otimes \bigwedge^k V = \begin{cases} U(\omega_k^e) \oplus St & \text{if } l = \text{odd and } k = \frac{l+1}{2} \\ U(\omega_k^e) & \text{otherwise,} \end{cases}$$

文 献

- [1] J.C. Jantzen: Representations of Chevalley groups in their own characteristics, Proc. Symposia, AMS 47, part 1 (1987), 127-146.
- [2] 奥山哲郎: BN-pair をもつ有限群の p-block theory, 「群とその表現」研究集会報告集 (1984), 176-185.
- [3] 津島行男: On certain projective modules for finite groups of Lie type, Osaka J. Math. (1990) vol. 27, 949-962.